

# 親子ひろしま訪問団

## 令和4年度訪問の記録

令和4年（2022年）8月5日～7日



秦 野 市



## ～ 目 次 ～

は し が き	・・・・・・・・・・・・・・・・ P1
I 親子ひろしま訪問団	
1 訪問の概要	・・・・・・・・・・・・・・・・ P3
2 訪問団員（参加者）の声	・・・・・・・・・・・・・・・・ P15
3 団員名簿	・・・・・・・・・・・・・・・・ P21
4 訪問団規約	・・・・・・・・・・・・・・・・ P22
II はだの平和の日のつどい	・・・・・・・・・・・・・・・・ P23
III 資 料	
1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文	・・・・・・・・・・・・・・・・ P24
2 広島市平和宣言	・・・・・・・・・・・・・・・・ P25
3 (広島)こども代表「平和への誓い」	・・・・・・・・・・・・・・・・ P27

◆訪問団の主なスケジュール

日 時	項 目	内 容
7月19日(火) ① 午後2時30分 ~3時30分 ② 午後3時30分 ~4時	① 説明会	訪問日程等の説明、「はだの平和の日のつどい」での報告方法検討
	② 結団式 市長表敬	市長メッセージ・千羽鶴の受渡し 場所：秦野市役所西庁舎3階 大会議室
8月5日(金) ~ 8月7日(日)	広島訪問	① 原爆の子の像へ千羽鶴を拝納 ② 広島平和記念資料館見学 ③ 平和記念式典参列 ④ 被爆体験聴講 ⑤ 平和記念公園内碑めぐり ⑥ とうろう流し ⑦ 宮島見学
8月14日(日) 午後5時15分 ~5時45分	はだの平和の日のつどい	訪問の活動報告 場所：クアーズテック秦野カルチャーホール（文化会館）ホワイエ

## は し が き

戦後50年を契機けいきに始まった「親子ひろしま訪問団」は、今年で26回目を迎え、248名の親子が広島を訪問しました。

戦争を起こしたのも人間、傷つき立ち上がって生きるのも人間。今年2月に起きたロシアによるウクライナへの軍事侵攻ぐんじしんこうなど戦争、内戦、紛争がたびたび報道ほうどうされている昨今、訪問団員8名にとって、平和記念資料館しりょうの見学、平和記念式典への参列、被爆体験談ひばくの聴講ちようこうなどの経験けいけんは、人間が起こす戦争の最悪の結果を知り、平和であることや命の重みを考える大変良い機会となったと思います。

また、訪問終了後には、訪問団が被爆地ひばくちヒロシマで感じ、学んできたことを広く市民へ継承けいしょうしていくため、8月14日に「はだの平和の日のつどい」を開催かいさいし、活動報告ほうこくを行いました。訪問団員の生の声が、会場の多くの人々の心に届いたと思います。

本市では、核兵器廃絶かくへいきはいぜつ、非核三原則ひかくさんげんそくの堅持けんじ、恒久平和を柱とした「平和都市宣言」こうきゅうへいわを定め、また、広島及び長崎両市が主導する「日本非核宣言自治体協議会」せんげんや「平和首長会議」かめいに加盟し、平和への思いを発信しています。

平成20年6月には、市民一人ひとりが改めて平和の大切さや命の尊とうとさを考える機会として、8月15日を「平和の日」と制定しました。毎年「平和の日」に近い日程で、市民を主体とした様々な平和事業を展開しています。

また、平成21年8月には、市内事業所の協力を得て、市役所に「平和の灯モニュメント」ともしびを、自治体としては全国で14か所目、神奈川県内では初めて設置せっちしました。このモニュメントの種火たねびは、同年の「親子ひろしま訪問団」が広島平和記念公園から採火さいかし持ち帰った炎ほのおを、「平和のシンボル」としてともし続けています。

今年、訪問団が広島市に届けた千羽鶴せんぼづるはおよそ6万羽にもなりました。一羽一羽、平和を願いながら、丁寧ていねいに折っていただいた多くの市民の皆様にみなさま、心からお礼を申し上げます。抱えきれないほどの千羽鶴の重さに、鶴を折られた皆様の思いを感じながら、心を込めて鶴つるを捧げました。

平和記念式典への参列や被爆体験談の聴講などの貴重な経験きんぎょを含め、被爆地広島で見聞きし学んだことを、団員一人ひとりが心に刻み込み、その思いを多くの人々に伝え、また次代へと語り継いでくれることを心から願います。



# I 親子ひろしま訪問団

## 1 訪問の概要

### (1) 訪問1日目・8月5日（金）

8：07 小田原駅出発

11：39 広島駅着

14：30 広島平和記念公園見学

千羽鶴を「原爆の子の像」に捧げる

15：00 広島平和記念資料館見学



「原爆の子の像」の前で

## 原爆の子の像

この像のモデル佐々木禎子氏は、2歳の時に爆心地から1.7キロメートルの自宅で被爆しました。足が速く、とても元気な子でしたが、小学6年生の時に原爆症を発症しました。入院中、鶴を千羽折れば病気が治ると言われ、信じて折り続けましたが、中学校に入学できずに亡くなりました。

「原爆の子の像」は禎子さんが通った小学校の同級生たちの呼び掛けにより、全国の学校や外国からの支援により建てられました。

原子力の研究でノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、この子どもたちの気持ちに感動し、博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫られた鐘を寄贈しました。その鐘の下に金色の折り鶴がつるされ、風鈴式に音が出るようになっています。この鐘と金色の折り鶴は平成15年に複製されたもので、オリジナルは広島平和記念資料館に展示されています。

訪問団は、広島到着後、市民から託された千羽鶴を手に広島平和記念公園へ向かい、原爆の子の像に捧げました。平和記念公園には世界中から大勢の人々が



平和な未来へ夢を託す少女の像



市民から寄せられた千羽鶴の拝納

集まり、原爆の子の像にもたくさんの千羽鶴が捧げられていました。

## 平和記念公園

この地域は、元々は広島でも有数の繁華街でした。しかし、爆心地に近かったため、原爆投下により壊滅しました。

その後、昭和29年（1954年）に平和を祈念し、建築家の丹下健三氏の手により公園として生まれ変わりました。

園内には平和記念資料館をはじめ、原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、平和の灯、平和の鐘など多くの碑やモニュメントなどが設置されています。

毎年、原爆が投下された8月6日には「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（平和記念式典）」が開催され、夜には元安川をはじめ市内六つの川で犠牲者を慰霊する「とうろう流し」が行われています。

平成28年5月には、バラク・オバマ元大統領がアメリカ合衆国大統領として初めて訪れ、原爆死没者慰霊碑の前で、核兵器なき世界の実現へ向けた思いをスピーチしました。

## 平和記念資料館

平和記念資料館は、被爆の実相を伝え、核兵器のない平和な世界の実現に貢献するために昭和30年（1955年）に開設されました。本資料館は、「導入展示」、「核兵器の危険性」、「広島のみち」の3つのゾーンに分けて展示している東館と被爆の実相を「8月6日の惨状」と「被爆者」の2つのゾーンに分けて展示している本館の二つの建物からなります。

本館で目を引いたのは原爆投下前後の広島市内の様子をプロジェクションマッピングで見ることのできる展示で、原爆が落とされて、一瞬で美しい広島が焼け野原になってしまった様子を見ることができます。亡くなった人が約14万人もいたことを知り、それだけ多くの人々が亡くなられた上、被爆されて今も苦勞されている方々も多くいらっしゃることを知りました。そのほか、8月6日の原爆投下以後の惨状の展示がされており、原爆で負傷した痛々しい姿の少女や人影が残る石など、被爆の実相を伝える展示が続きます。

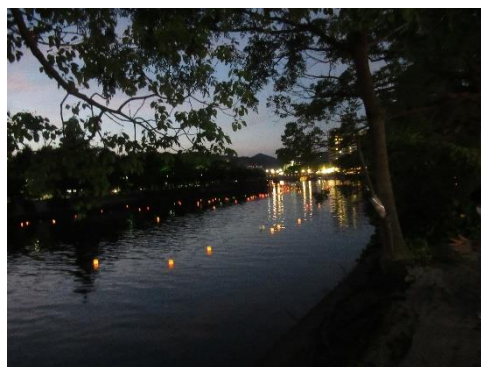


原爆投下前後の様子が分かる  
プロジェクションマッピング



## (2) 訪問2日目・8月6日(土)

- 8:00 原爆死没者慰霊式並びに  
平和祈念式参列
- 10:00 被爆者体験談の聴講
- 13:30 平和記念公園内の碑めぐり
- 19:30 とうろう流し



それぞれの平和への思いを灯籠に込めた

### 原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

毎年8月6日に、被爆者、政府、自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列し、原爆死没者の冥福と恒久の平和を願って行われています。

午前8時に開会し、松井一實広島市長と遺族代表が、原爆死没者名簿を原爆慰霊碑に納めました。

この1年間に新たに亡くなったり、死亡が確認されたりした被爆者は4,978名。名簿搭載者の総数は33万3,907名に、名簿の数は123冊

となりました。

原爆が投下された午前8時15分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼と不戦の誓いを新たにしました。訪問団は、初めて参列する式典の、テレビを通して見る様子とは異なる厳粛な雰囲気緊張しながら、参列する多くの被爆者及び遺族とともに黙とうを捧げました。



式典に参列する団員たち

黙とう後、松井一實広島市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「平和宣言」が発信されました。

松井市長は平和宣言で、77年前の原爆で母を失った当時16歳の女性の被爆体験を紹介し、「一刻も早くすべての核のボタンを無用のものにしなければならぬ」と訴えました。また、「核の脅し」を続けるロシアを念頭に、「他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのか」と述べました。



平和宣言を行う松井広島市長

また、国連のグテーレス事務総長は式典のあいさつの中で、「核の脅威に対する唯一の解決策は核兵器を一切持たないことだと認識しなければならない」と述べ、世界の指導者たちに向け「核という選択肢を取り下げて、永遠に」と呼びかけました。

子どもたちは、出席者の挨拶や同年代であることも代表の誓いの言葉に真剣な表情で耳を傾け、平和への思いと、この貴重な経験を心に刻みました。

## 原爆死没者慰霊碑

平和記念公園の中央に位置する、古墳時代の家形埴輪に似たデザインの碑で、中央の石室には原爆死没者名簿が納められています。

碑の正面には、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませんから」という言葉が刻み込まれています。この碑文には主語がありません。人類の誓いであるからです。

この静かで短い言葉には、原爆死没者への哀悼と、戦争という過ちを二度と繰り返さないという平和への願いと誓いが込められており、見る者の心を打ちます。原爆が投下された事実、また核兵器のない世界を実現する為に、みんなで語り継ぎ平和を訴え続けていきたいと思います。



直線上に原爆ドームが見える設計になっている

## 平和の灯

昭和39年(1964年)8月1日建立。当時、東京大学の教授だった丹下健三氏的设计により、全国12宗派から寄せられた「宗教の火」や溶鉱炉などの全国の工場地帯から届けられた「産業の火」が、昭和20年(1945年)8月6日生まれの7名の女性により点火されました。

建立の目的は「水を求めてやまなかった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求するため」。この火は、点火された日以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核の象徴です。

本市では、平成21年8月6日に、平和の象徴として、市役所本庁舎玄関横に「平和の灯モニュメント」を設置しました。同年の親子ひろしま訪問団がこの「平和の

灯」から採火し持ち帰った火が、燃え続けています。

## 被爆体験談聴講

平和記念式典参列後、講師の増岡清七氏から被爆体験のお話を伺いました。増岡氏は、被爆当時の状況やその時の恐怖について子どもたちにも分かるよう丁寧に話し、その言葉は、戦争そして原爆の恐ろしさ、平和の大切さを訪問団に静かにしかし強く訴えかけました。

### 【被爆体験談（増岡清七氏のお話から抜粋）】

昭和20年(1945年)8月6日は、建物疎開作業のため、約8,300名の中学生が作業をしていた。学徒動員令により当時の中学生は、夏休みもなく工場等で作業や建物疎開に従事することになっていた。

建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぎ、住民の避難場所のために建物を壊し、空き地をつくることで、当時、県庁や市庁舎周辺は建物疎開で空き地となっていた。当日、増岡氏を含む3年生の半数の70名は、爆心地から約1キロメートルの場所で、引率の先生の話聞いていた。

午前8時15分、突然、強い光が目に入り、左からの風で押し上げられ、地面にたたきつけられた。そのまま意識を失い、原爆特有の「ピカ（光）ドン（音）・きのご雲」の記憶はなかった。

意識が戻り、見渡すと夜のように真っ暗な中、空から火が降って見え、悲惨な状況が広がっていた。原爆が落ちたと知ったのは後のことだった。

生き残った学友たちを見ると、みんな皮膚が垂れ下がり、一見誰だか分からないほどの形相だった。熱で剥がれた皮膚は、爪のところで止まり、とぐろを巻くように垂れ下がっていた。

増岡氏も左顔面や腕など皮膚が垂れ下がり、今もその痕が残る。何が起こったのか、どこが安全なのかも分からないまま、爆心地から市外へ必死で逃げた。炎に焼かれ、死に逝く人たちを見ながら、とにかく「死にたくない」一心で逃げ

#### 増岡清七氏（広島市在住）



爆心地から約1kmで被爆。当時中学3年生。戦後、高校で教鞭をとっていたが、退職後、「被爆語り部」として、反核・平和を訴え続けている。

た。「生きたい」ではなく「死にたくない」という気持ちで。「生きたい」には希望があるが、「死にたくない」は絶望の中で感じる事。広島市の市街が<sup>ほのお</sup>炎で燃え上がっている中「死にたくない」とたどり着いた<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕には、人が重なり合い、あふれていた。



被爆体験談聴講

ひん死の状態、水や家族を求めていた。<sup>こかげ</sup>木陰でそのまま<sup>ねむ</sup>眠ってしまったところを翌日、<sup>よくじつ</sup>救助隊の馬車で市外の民家の<sup>ざしき</sup>座敷に運ばれた。<sup>すで</sup>既に多くの人が丸太のように横たわっていた。この時、初めて<sup>きたな</sup>汚い布で<sup>かんぶ</sup>患部を<sup>ふ</sup>拭いたが、<sup>ちりょう</sup>治療はされなかった。

翌日、<sup>よくじつ</sup>汚い茶碗<sup>ちやわん</sup>によそわれた<sup>かゆ</sup>お粥が1杯置かれたが、<sup>ひふ</sup>皮膚のうみで左目と口が開かず、食べるのに困った。<sup>ひふ</sup>皮膚が<sup>た</sup>垂れ下がった左顔面や腕に<sup>うで</sup>太陽の光が当たると、<sup>はり</sup>針でチクチク刺されるような痛みが続いた。数日後、行方を必死で<sup>さが</sup>探してくれた父親と再会し、<sup>にぐるま</sup>荷車に乗せられ<sup>しんせき</sup>親戚宅に行った。

その時は、<sup>ますおか</sup>増岡氏の体を<sup>きづか</sup>気遣って教えられなかったが、<sup>じたく</sup>自宅は<sup>ぜんかい</sup>全壊、<sup>そくし</sup>母親は即死していたと、後に父親から伝えられた。<sup>りょうよう</sup>療養のための旅行で留守にして死を<sup>まぬか</sup>免れた父親も<sup>よくとし</sup>翌年、<sup>ますおか</sup>増岡氏が15歳のときに亡くなった。<sup>おそ</sup>恐らく、<sup>ますおか</sup>増岡氏が行方を<sup>さが</sup>探すために<sup>げんぱく</sup>原爆投下直後の<sup>ひろしま</sup>広島を歩いて<sup>さか</sup>回る中で、<sup>ざんりゅうほうしゃのう</sup>残留放射能を浴びてしまったためと思われる（<sup>にゅうしひばく</sup>入市被爆）。<sup>かそう</sup>火葬する設備がなく、自分自身で<sup>す</sup>だびに付した。<sup>すで</sup>既に兄は<sup>とっこうたいいん</sup>特攻隊員として<sup>おきなわ</sup>沖縄で戦死しており、家族は姉と二人きりになってしまった。

学友たちも多くが<sup>げんぱく</sup>原爆により<sup>な</sup>亡くなったが、そのうちの一人の<sup>いひん</sup>遺品が、<sup>てんじ</sup>平和記念資料館に展示されている。

## げんぱく 原爆ドーム

後に「<sup>げんぱく</sup>原爆ドーム」と呼ばれるこの建物は、大正4年（1915年）に<sup>ひろしま</sup>広島県の<sup>はんばいそくしん</sup>物産品の販売促進を図る<sup>きよてん</sup>拠点として建設され、建設当時は「<sup>ひろしま</sup>広島県物産<sup>ぶつさん</sup>陳列館」という名称でした。その後、「<sup>ひろしま</sup>広島県産業<sup>さんぎょうしょうれいかん</sup>奨励館」と改称されましたが、<sup>ちんれつかん</sup>県内の物産品の<sup>めいしょう</sup>展示・<sup>てんじ</sup>販売を行うほか、<sup>はんぱい</sup>博物館、<sup>かいしょう</sup>美術館としての役割も<sup>やくわり</sup>担っていました。

しかし、戦争が激しくなった昭和19年（1944年）3月、産業奨励館としての業務が廃止され、内務省中国・四国土木出張所や広島県地方材木・日本材木広島支社など統制会社の事務所として使用されていました。

設計者はチェコの建築家ヤン・レツル氏で、構造は一部鉄骨を使用したレンガ造り、石材とモルタルで外装が施されていました。全体は3階建てで、正面中央部分に5階建ての階段室、その上に銅板の楕円形ドームが載っていました。

爆心地から約200メートルの場所に位置し、原爆投下により爆風と熱線を浴びて大破し、天井から火を吹いて全焼しました。爆風がほとんど垂直に働いたため、本館中心部は奇跡的に倒壊を逃れたものの、館内にいた全ての人々は即死しています。



平和そして核兵器廃絶の象徴である原爆ドーム

鉄骨部分がむき出しの残骸と化し、いつからともなく「原爆ドーム」と呼ばれ、平成8年（1996年）に世界遺産へ登録されました。

静かにたたずむ原爆ドームの姿は、平和記念資料館で原爆に関する様々な資料を見た訪問団に、同じような悲劇を繰り返してはいけないと改めて強く感じさせられました。

## 平和記念公園内の碑めぐり

平和記念公園及びその周辺には、原爆犠牲者の慰霊碑など50を超える原爆関連の記念碑や記念建造物があります。訪問団員は猛暑の中、それらのいくつかをじっくり見学し、戦争や原爆の恐ろしさを実感しました。



ガイドの説明に聞き入る団員たち

## ひばく 被爆したアオギリ



原爆の被害を訴え続けるアオギリ

ばくしんちから約1.5キロメートルはな離れた  
東白島町にあった当時の広島通信局の中庭に、  
3本のアオギリの木が植えられていました。  
げんばく原爆の投下によって、熱線と爆風をまともに受け  
た3本のアオギリは、枝葉が全て無くなり、ばくしんち  
側の幹の半分がやこ焼け焦げました。

しかし、かき枯れ木同然だったアオギリはよくとし翌年の春、  
きせきてき奇跡的に新芽を出し、そのすがたは、げんばく原爆投下と敗戦に  
よってひへい疲弊した人々の心に、生きる勇氣と希望をあた与えました。

昭和48年（1973年）、当時の中国郵政局（かつての通信局）の建てか  
えに伴い、平和記念公園内の現在の場所に移植されました。3本のうち1本はか  
枯れてしまいましたが、このひばく被爆したアオギリの種子は国内外におく贈られ、「ひばく被爆アオ  
ギリ2世」として大切に育てられています。

## とうげさんきち し ひ 峠三吉詩碑

とうげさんきち峠三吉氏は、ばくしんち爆心地から約3キロメートルはな離れた自宅で被爆しました。その体  
験を文学の活動を通して発表し、げんばく原爆反対、ようご平和擁護の作品を数多く残しました。  
その代表作である「げんばく原爆詩集」は、世界的なはんきょう反響をあた与えました。

平和記念公園内のひぶん碑文には、次のような詩がきざ刻まれています。

「ちちをかえせ ははをかえせ としよりをかえせ こどもをかえせ  
わたしをかえせ わたしにつながるにんげんをかえせ  
にんげんの にんげんのよの あるかぎり  
くずれぬへいわを へいわをかえせ 峠 三吉」

## 島病院

昭和8年（1933年）に開業。原爆投下により壊滅しましたが、昭和23年（1948年）に同所に再建されました。

広島市への原爆投下における爆心地として、各時代の資料に「島病院」「島外科」と記載されていますが、これらは全て現在の島外科内科に当たります。

昭和20年（1945年）8月6日に原爆リトルボーイが投下された際、病院の上空でさく裂したことが調査により判明したため、同所が爆心地とされています。

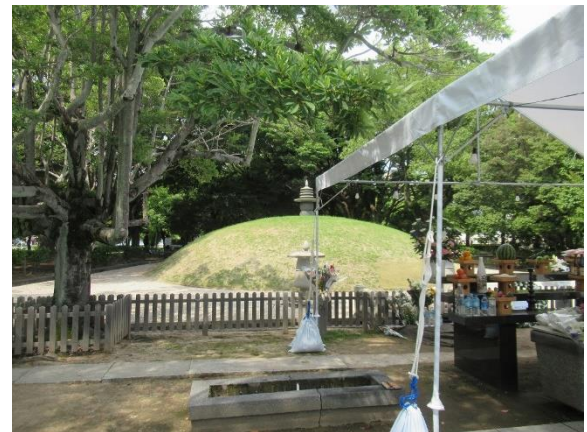


爆心地の碑

## 原爆供養塔

爆心地に近いこの付近には、被爆後、遺体が散乱し、また、川から引き上げられたものなど、無数の遺体が運ばれ、だびに付されました。

昭和21年（1946年）、市民からの寄附により、仮供養塔、仮納骨堂、礼拝堂が建立され、その後、昭和30年（1955年）に、広島市が中心となり老朽化した



原爆供養塔

納骨堂を改築し、各所に散在していた引き取り手のない遺骨もここに集め納めました。身内の見つからない遺骨や氏名の判明しない遺骨約7万柱が納められています。

毎年8月6日には、様々な宗教及び宗派合同の供養慰霊祭が営まれています。

## 韓国人原爆犠牲者慰霊碑

終戦時、日本には約300万人の朝鮮人がおり、数万人が広島市内で被爆したといわれています。

「死者の霊は亀の背に乗って昇天する」という故事にならって、亀を形取った



韓国人原爆犠牲者慰霊碑

台座の上に碑柱が建ち、その上に二つの竜を刻んだ冠が載せられています。

碑は、当初、軍人であった朝鮮王家の一族李殿下が司令部への出勤途中に原爆投下に遭い、その後発見された場所付近ということから、本川橋西詰めに建立されました。

その後、各方面からの強い要望により、平成11年（1999年）7月に平和記念公園内に移設されました。慰霊碑の石は、国に帰れなかつた人々への思いから、ふるさと韓国の石が使われています。

韓国の石が使われています。

## 平和の鐘

核兵器と戦争の無い平和な世界の達成を目指し、その精神文化運動のシンボルとして建立されました。この鐘の音を広島から世界の隅々まで響き渡らせ、全人類の一人ひとりの心にしみわたらせることを願い、訪問者が自由に鐘を鳴らせるようになっています。



平和への思いを込め、鐘を突く団員

鐘は、梵鐘の分野で重要無形文化財保持者（人間国宝）である香取正彦氏が制作し、表面には「世界は一つ」を象徴する国境の無い世界地図が浮き彫りにされています。

撞座は、原水爆禁止の思いを込めて原子力のマークがデザインされており、鐘楼の周囲の池には大賀ハスが植えられています。

被爆当時、ハスの葉で傷を覆い、やけどの痛みをしのいだという被爆者の霊を慰めたものです。

## とうろう流し

原爆は一瞬にして多くの命を奪いました。そして、即死を免れてもひどいやけどを負った人たちが大勢いました。その人たちの多くは、その熱さと痛みに耐えかねて近くの川に次々に身を投げ、川面には遺体が浮き、川底にも遺体が沈んでいたとい



います。

戦後、駅前を中心にヤミ市がにぎわい、中心部にバラック建ての商店が建ち始めた昭和23～4年頃、親族や知人<sup>げんぼく いぞく ついぜん くよう</sup>を原爆で失った遺族や市民たちが追善と供養のため、手作りの灯籠<sup>とうろう</sup>を川に流したのが、「とうろう流し」の始まりとされています。

灯籠<sup>とうろう</sup>には、亡<sup>な</sup>くなった方の名前と流した人の名前<sup>か</sup>を書き込<sup>こ</sup>込むのが一般的<sup>いっぱんてき</sup>ですが、最近<sup>さいきん</sup>は「平和への思い」が書かれる光景も目立ちます。長い歴史を持つ「とうろう流し」は、慰霊<sup>いれい</sup>とピースメッセージの両方の意味を持つようになりました。毎年8月6日の夕刻<sup>ゆうこく</sup>に元安橋<sup>もとやすばし</sup>の上流から流されています。

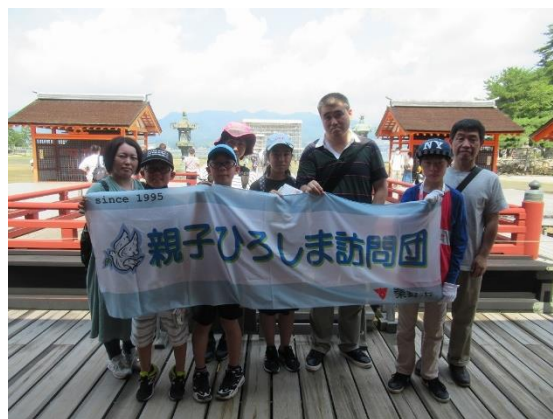


元安川を彩る灯籠

今年はコロナ禍のため自分で川に流すことは出来ませんでした。各自メッセージを記入して、係りの人に思いを託しました。日が落ちて薄暗くなった頃、川のほとり<sup>ほとり</sup>に行くと、ゆったりと沢山の灯籠<sup>とうろう</sup>が流れていました。広島訪問2日目を終えた訪問団8名は、平和施設<sup>しせつ</sup>見学や平和記念式典出席を経て感じたそれぞれの平和への思いを心でつぶやき、幻想<sup>げんそうてき</sup>的な風景を見つめていました。

### (3) 訪問3日目・8月7日(日)

- 9:00 広島駅発
- 10:00 世界遺産「<sup>いつくしまじんじゃ</sup>厳島神社」見学
- 17:06 広島駅発
- 20:38 小田原駅着・解散



世界遺産・宮島「厳島神社」を見学

# 世界遺産「厳島神社」・日本三景「宮島」見学の様子



## 2 訪問団員（参加者）の声

### (1) 訪問前の感想

#### ア 親の声

●保健福祉センターで上映された「さとうきび畑の唄」を家族で見て、戦争と平和について家族で話し合う機会がありました。子どもたちは戦争の悲惨さに大変ショックを受けておりましたが、現在進行形でロシアとウクライナが戦争をしている状況を真剣に受け止めております。

平和は当たり前ではないということ、私たちにいったい何ができるのかを改めて考えさせられました。広島でこの目で見て聞いて感じてきたことをまた家族で話し合いたいと思います。

●今回の親子ひろしま訪問団に参加しようと思ったきっかけは、子供が参加してみたいと思ってくれたことが一番でした。あまり積極的に何かをやる子ではないので、いい機会かと思い参加させていただきました。自分自身も戦争を知らない世代であり、最近ではテレビの中で報道されるウクライナの現状をみて、戦争というものが、いかに残酷で痛ましいものかということを知っています。

今回の訪問団に参加することで、平和記念資料館で色々なものを見て、被爆者の体験談を拝聴し戦争の悲惨さを知り、より平和について考える機会が得られたらいいと考えています。

子供についても、今回参加することにより、色々と感じ取ってもらい平和について考えるよいきっかけになってもらえたらと思います。

●2022年ウクライナでの戦争が始まり、日々残酷な映像がニュースで流れるようになりました。銃で撃ち合うゲームの中のような世界が、異国で起こっていると知って、子供はどう捉えているのでしょうか。食べる物にも困らず、安心して眠れる場所があり、友達や家族と会える豊かな暮らしの中で、子供が戦争や平和に興味を持てるのだろうか疑問でした。また、私自身でうまく説明する正しい情報も持っていません。

原爆が投下された広島を訪れ、体験者の語りを聞かせて頂くことで、教科書や映像からだけでは得られない、貴重な学びの機会になると思います。災害、テロ、感染症等、平和な暮らしに危機を感じる出来事が起こりうる今、だからこそ親子で平和について考える良い機会だと考え、参加を決意しました。

●コロナ禍で色々と制限されてきた子どもに、貴重な体験をして欲しく、親子ひろしま訪問団に応募しました。平和記念式典に参列、また原爆ドームや平和記念資料館の見学、被爆体験談の聴講など親子で平和や戦争について学べるのでとても有り難く思います。

またこの訪問団参加をきっかけに親子で平和、戦争について考える時間を作りました。今回の体験を自身の目で見て耳で聞いて、平和の大切さ戦争の悲惨さを学び子どもがひと回り大きく成長してくれる事を期待しています。

## イ 子どもの声

●ウクライナで戦争が行われていて、毎日ニュースを見ると多くの人が亡くなって悲しいと思います。日本で初めて原子爆弾が落とされて、多くの人が亡くなったと勉強しました。広島の人がどんな思いでいたのか、体験談の方の話を聞いてみたいと思います。

●小学6年生の時に、国語の授業で「ヒロシマのうた」というお話を勉強し、そこで原爆のことを知りました。

親子ひろしま訪問団をきっかけに、私が生まれる前にあった広島原爆や戦争のことを知って、もっと詳しく勉強したいと思いました。今までテレビや新聞でしか見たことがなかった原爆ドームを実際にみて、平和についてより深く知っていきたいと思います。

●広島に行って平和関連や、原爆の事を詳しく知りたいと思いました。理由は去年の社会科の学習で、戦争の恐ろしさ、平和の大切さ、命の尊さを知って、原爆を体験した人に話を聞いて恐ろしさをもっと知って、その恐ろしさを次の世代につなげていきたいと思いました。

テレビで8月6日に原爆が落ちてから〇〇年と毎年見て、その重要さを忘れてはいけないと思いました。もしまた原爆が落ちてきても、命を少しでも守りたい。あと、被爆者体験談で話を聞いてみたい。とうろう流しでは亡くなってしまった人に、今は平和な事を伝えたいです。

●ぼくは、戦争のことをぜんぜん知らないから、ひろしま訪問団の話をお母さんから聞いて戦争のことをいっぱい知りたいと思いました。

初めての広島でちょっと緊張するけど、原爆ドームを見に行くのが楽しみです。あととうろう流しも出来るのが楽しみです。秦野市の代表として家族や友達のいろんな人に話して伝えたいです。

## (2) 訪問後の感想

### ア 保護者の声

●平和とは何か、あまりにも当たり前感じていたので、特に考えたこともなかったと思います。誰もが学校で習う戦争の悲惨さ。所詮、教科書で見て聞いて終わる、歴史上の出来事。弥生時代、お米作りがはじまり、集落ができて、リーダーが生まれ、権力者が出てきて、争いごとが始まりいつの時代も同じ、弱肉強食の世界。

息子が学校で第2次世界大戦のことを習い、平和について家族で話す機会ができ、2年前に家族で広島に行こうと計画をするも、新型コロナウイルスの感染拡大でいけませんでした。そんな中、今回の親子ひろしま訪問団の事を知り、応募した次第です。

被爆体験の話が生で聞けるということが一番うれしく思いました。いくら資料で勉強しても、実際体験した方から語られる言葉とは比較にならないと思います。増岡さんの話は、息子にもしっかり届いておりました。原爆資料館に書いてあったことよりも、かなり心に響いたみたいです。もちろん、私にも。

●原爆や戦争のことについては、出発前はメディアや書籍などでしか見たことがなかったが、実際に現地で被爆者の体験談の聴講や平和記念資料館の展示物を目の当たりにすると、改めて大変なことが起きたのだと感じました。

ロシアはウクライナへの原爆投下を示唆していますが、今回色々みて、危機、原爆投下後の広島のことを考えると原爆の使用は決してあってはならないことだと思いました。世界から核兵器がなくなり、一日でも早く「平和の灯」が消えることを願います。

また、平和記念式典への参列という大変貴重な体験をさせていただき感謝しています。世界の多くの方々が参列されている姿を拝見し、世界中で平和を望んでいるのだと思いました。自分自身も平和・原爆・戦争などについて、今以上に学んでいかななくてはならないと感じました。

●3日間の広島訪問は短く感じられるも、有意義な時間でした。被爆者体験談では、死の恐怖、平和とは何かを、生の声で聴くことができ、当時の様子が伝わってきました。

平和記念式典では、厳かな雰囲気の中、世界の国々の人が集結し、平和の祈りを捧げました。被爆にあった人々が水を求めて集まり苦しみ、息絶えていった川も、穏やかにゆっくりと流れていて、爆風で荒れた地とは想像もつきません。自分の目で確かめ、苦

しんだ体験を聴き、被爆地の土を踏むことは、教科書からだけでは得られない戦争の悲惨さを実感することになりました。

日本は平和な暮らしが出来るようになって、今も被爆の後遺症で苦しんでいる方々があります。繰り返してはならない過ちをどうしたら防げるか、ただ一つの被爆国である日本が、世界平和の為に担う役割は大きい。私達でも出来ることは、語りつないでいくことだと、確信しました。

平和記念式典でこども代表の平和の誓いが、心に響いた。会場に響き渡る、大きな拍手がそれを物語っていたと思います。子供にも正しい情報を伝えていけば、きちんと理解できます。純粋な心でそれを受け止め、分かりやすい言葉で世界中に発信できます。

被爆者も高齢化が進んでいる中、教育の現場において、声を聴ける機会がもっと設けられて、子供達に語り継がれる事が重要だと感じました。

●平和記念資料館を見学して、白黒だけれど生々しく痛々しい写真に心が締め付けられました。また平和記念式典に参加出来た事は一生の思い出になりました。

平和記念公園では死没者への祈り、また平和を願う方々の列が途切れる事なく続いているのを目の当たりにして、被爆者増岡さんの話にあった「1人でも不幸な人がいたら手を差し伸べる」という言葉を今後実行出来るようにしていきたいです。

帰りの電車では、普段知らない人に声を掛けられない息子がお年寄りの方に席を譲っていました。これも今回のひろしま訪問団に参加して成長した一部だと思います。出発まではコロナ対策が大変でしたが、参加出来て大変嬉しく感謝しています。

## イ 子どもの声

●原子爆弾で多くの方が亡くなった。2km先まで焼け野原になり、三輪車や自転車やがんじょうな建物も燃えてしまい驚きました。

被爆体験者の増岡さんから、死にたくない、死にたくないと言いながらたくさんの方が亡くなったのを聞いて、悲しくなりました。

放射能を浴びて生き残っても、10年後に亡くなったり、20年後に亡くなったり、10年周期で亡くなってしまうことも驚きました。

悲しみでいっぱいになる戦争は、繰り返してほしくないと思いました。

●出発前は、広島平和記念資料館の中がどのようなものかよくわからなかったが、実際に行ってみて展示されているものを見ると思っていた以上に衝撃的な光景でした。

当時の人たちの惨状を目の当たりにし、とても大変であったのだろうと感じました。

また、平和記念式典に初めて参列し、総理大臣をはじめ色々な方のお話を目の前で聞けて大変貴重な体験ができてよかったと思いました。

これからも今まで以上に平和のことについて考えていきたいと思いました。

●授業で戦争の話は聞いたことがありました。でも資料館に行って、自分の想像以上にショッキングでした。目に映るものに驚き、悲しくなりました。破れたり血が付いた遺品の服を見て、背中に寒気が走りました。

自分だったらどうしよう。まだ1世紀も経たない、77年前にこんな事があったなんて、遠い昔の事ではありません。色々な国の人が見学していて、他の国もみんな仲良くして戦争はしないと誓ってほしいなと思いました。

増岡さんの被爆体験談では、目標をもって生きること、自分だけでなく周りの人の幸せも考えることを教わりました。僕もそのことを忘れずに、みんなと助け合って生きていこうと思いました。

世界文化遺産の厳島神社は、とても楽しみにしていたので、3日目は朝からワクワクしていました。宮島の美しい景色がとても良かったです。フェリーからみる海と神社は、ファンタジーの世界のようで見とれてしまいました。今度は改修後の鳥居を見に来たいです。

自分が頑張った点は、平和記念式典で長い時間座っていられた事、暑い中沢山歩いた事です。「疲れた？大丈夫？」と声をかけてくれたり、電車で席を譲ってくれたりして、一人ではくじけそうなことも、皆さんと一緒にだったから出来たと思います。訪問団の皆さんは、優しく楽しいメンバーで、また会う機会が会ったら嬉しいなと思いました。

●今まで戦争や被爆体験した人の話を直接聞いた事がなかったので増岡さんの被爆体験を聞いて嬉しかったです。増岡さんの話は分かりやすかったし、その時の事がよく分かりました。テレビやインターネットで見るより、原爆ドームや資料館、記念碑などを自分の目で見られたからすごく理解が出来ました。あと原爆ドームの溶けて曲がった螺旋階段を見て、原子爆弾の威力の凄さが分かりました。



### 3 3 団員名簿

保護者 氏名	子ども 氏名	役 割
うちだ みずほ 内田 瑞穂	うちだ かなた 内田 奏風 本町中2年	団 長
みねむら くにと 峰村 国人	みねむら ひでたか 峰村 英孝 南が丘中2年	副団長
うさみ ゆき 宇佐美 由貴	うさみ あつき 宇佐美 暁 南小5年	記 録
すずき よしまさ 鈴木 辰昌	すずき まい 鈴木 まい 南中1年	会 計
あさくら まさよ 朝倉 真代	あさくら こうた 朝倉 煌太 鶴巻小6年	監 事

※内田さん親子は残念ながら欠席となりました。

## 4 訪問団規約

(名称)

第1条 この訪問団の名称は、親子ひろしま訪問団（以下「訪問団」という。）という。

(目的)

第2条 訪問団は、原爆被災地である広島を訪問し、団員自らがその目で戦争の悲惨さを見ることにより、平和の尊さを学ぶことを目的とする。

(事業)

第3条 訪問団は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 原爆ドーム等を視察することにより、原子爆弾を始めとした戦争兵器使用による殺りくの悲惨さを学ぶ。
- (2) 平和祈念式典に参加することにより、無意味な戦争の否定を決意するとともに、恒久の平和の追求を決意する。
- (3) 原子爆弾が投下され、壊滅的な被害を受けながらも希望を持って築きあげられた今日の広島市等を視察することにより、平和の尊さ及び不屈の努力の成果を学ぶ。
- (4) その他目的を達成するために必要な事業。

(組織)

第4条 訪問団は、公募等の方法による希望者から選ばれ構成される親子5組10人により組織する。

- 2 訪問団に、団長、副団長、会計、監事及び記録を置き、それぞれ訪問団員の互選により定めるものとする。
- 3 団長は、訪問団の事業を総理し、訪問団を代表するものとする。
- 4 副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行するものとする。
- 5 記録は、訪問団の事業を記録するものとする。
- 6 会計は、訪問団の経理を処理するものとする。
- 7 監事は、会計を監査するものとする。
- 8 訪問団の事務局は、秦野市役所平和主管課に置く。

(解散)

第5条 訪問団は、第2条の目的を達成したときに解散するものとする。

(経費)

第6条 訪問団の経費は、訪問団員の自己負担金、市からの補助金、その他の収入をもって充てる。

(その他)

第7条 この規約に定めるもののほか、訪問団の運営に関して必要な事項は、団長が定めるものとする。

附 則

この規約は、平成7年6月15日から施行する。

この規約は、平成28年4月1日から施行する。

この規約は、平成31年4月1日から施行する。

## Ⅱ はだの平和の日のつどい

訪問を終え、秦野の地へ帰った親子ひろしま訪問団は、8月14日（日）に秦野市文化会館ホワイエにて「平和の日事業」として開催された「はだの平和の日のつどい」で、来場した100名を超える観客を前に訪問の活動報告を行いました。彼らが肌で感じ、学んできた、その生の声は、会場の市民の心にも深く刻まれました。



なお、今年度の「はだの平和のつどい」では、公募市民6団体によるコンサートも行われました。

### 【16:00～】開 会

ピースキャンドルナイト実行委員会の細越委員長の挨拶により開会しました。



### 【16:05～】コンサート①

平和への思いを込め、3団体が演奏を披露しました。



### 【17:15～】親子ひろしま訪問団活動報告

団員6名が自分の言葉で、広島で学んだことを報告しました。  
※2名体調不良のため欠席



### 【18:30～】コンサート②

平和への思いを込め、3団体が演奏を披露しました。



### Ⅲ 資 料

#### 1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文

##### ◎秦野市民憲章

わたくしたち秦野市民は、丹沢の美しい自然のもとで、このまちの限りない発展に願いをこめ、ここに市民憲章を定めます。

- 1 平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。
- 1 きれいな水とすがすがしい空気、それは私たちのいのちです。
- 1 健康ではたらき若さあふれるまち、それは私たちのねがいです。
- 1 市民のための豊かな文化、それは私たちののぞみです。
- 1 みんなの発言で住みよいまちを、それは私たちのちかいです。

この市民憲章は、秦野市の発展を願って昭和44年10月1日に制定したものです。

##### ◎秦野市平和都市宣言

私たち秦野市民は、平和への限りない願いをこめて「平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。」と市民憲章に定めた。

私たちの責務は、この精神にのっとり永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り次代へ引き継いでいくことである。

しかし、武力紛争は世界各地で絶え間なく続き、際限のない軍備拡大と核兵器の増強は、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

世界の恒久平和は、すべての人々の切なる願いである。私たち秦野市民は、国際平和年に当たり非核三原則を堅持するとともに、永久の平和とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和61年3月27日制定

##### ◎秦野市平和の日制定について

私たち秦野市民は、永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り引き継いでいく精神をうたった秦野市民憲章と秦野市平和都市宣言の理念の下に、一人ひとりがそれぞれの信条や立場を越えて、平和についてともに考え、語り合うことにより、平和への願いを未来に向け継承していくため、ここに「秦野市平和の日」を制定します。

秦野市平和の日 毎年8月15日

平成20年6月9日制定

## 2 広島市平和宣言<sup>せんげん</sup>

母は私の憧れで、優しく大切に育ててくれました。そう語る、当時、16歳の女性は、母の心尽くしのお弁当を持って家を出たあの日の朝が、最後の別れになるとは、思いもありませんでした。77年前の夏、何の前触れもなく、人類に向けて初めての核兵器が投下され、炸裂したのがあの日の朝です。広島駅付近にいた女性は、凄まじい光と共にドーンという爆風に背中から吹き飛ばされ意識を失いました。意識が戻り、まだ火がくすぶる市内を母を捜してさまよい歩く中で目にしたのは、真っ黒に焦げたおびただしい数の遺体。その中には、立つ たままで牛の首にしがみついた黒焦げになった遺体や、潮の満ち引きでぷかぷか移動しながら浮いている遺体もあり、あの日の朝に日常が一変した光景を地獄絵図だったと振り返ります。

ロシアによるウクライナ侵攻では、国民の生命と財産を守る為政者が国民を戦争の道具として使い、他国の罪のない市民の命や日常を奪っています。そして、世界中で、核兵器による抑止力なくして平和は維持できないという考えが勢いを増しています。これらは、これまでの戦争体験から、核兵器のない平和な世界の実現を目指すこととした人類の決意に背くことではないでしょうか。武力によらずに平和を維持する理想を追求することを放棄し、現状やむなしとすることは、人類の存続を危うくすることにほかなりません。過ちをこれ以上繰り返してはなりません。とりわけ、為政者に核のボタンを預けるということは、1945年8月6日の地獄絵図の再現を許すことであり、人類を核の脅威にさらし続けるものです。一刻も早く全ての核のボタンを無用のものにしなければなりません。

また、他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのでしょうか。私たちは、今改めて、『戦争と平和』で知られるロシアの文豪トルストイが残した「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ」という言葉をかみ締めるべきです。

今年初めに、核兵器保有5か国は「核戦争に勝者はなく、決して戦ってはならない」

「NPT（核兵器不拡散条約）の義務を果たしていく」という声明を発表しました。それにもかかわらず、それを着実に履行しようとしなければいかりか、核兵器を使う可能性を示唆した国があります。なぜなのでしょう。今、核保有国がとるべき行動は、核兵器のない世界を夢物語にすることなく、その実現に向け、国家間に信頼の橋を架け、一步を踏み出すことであるはず。核保有国の為政者は、こうした行動を決意するためにも、是非

とも被爆地を訪れ、核兵器を使用した際の結末を直視すべきです。そして、国民の生命と財産を守るためには、核兵器を無くすこと以外に根本的な解決策は見いだせないことを確信していただきたい。とりわけ、来年、ここ広島で開催される G7 サミットに出席する為政者には、このことを強く期待します。

広島は、被爆者の平和への願いを原点に、また、核兵器廃絶に生涯を捧げられた坪井直氏の「ネバーギブアップ」の精神を受け継ぎ、核兵器廃絶の道のりがどんなに険しいとしても、その実現を目指し続けます。

世界で8, 200の平和都市のネットワークへと発展した平和首長会議は、今年、第10回総会を広島で開催します。総会では、市民一人一人が「幸せに暮らすためには、戦争や武力紛争がなく、また、生命を危険にさらす社会的な差別がないことが大切である」という思いを共有する市民社会の実現を目指します。その上で、平和を願う加盟都市との連携を強化し、あらゆる暴力を否定する「平和文化」を振興します。平和首長会議は、為政者が核抑止力に依存することなく、対話を通じた外交政策を目指すことを後押しします。

今年6月に開催された核兵器禁止条約の第1回締約国会議では、ロシアの侵攻がある中、核兵器の脅威を断固として拒否する宣言が行われました。また、核兵器に依存している国がオブザーバー参加する中で、核兵器禁止条約が NPT に貢献し、補完するものであることも強調されました。日本政府には、こうしたことを踏まえ、まずは NPT 再検討会議での橋渡し役を果たすとともに、次回 の締約国会議に是非とも参加し、一刻も早く締約国となり、核兵器廃絶に向けた動きを後押しすることを強く求めます。

また、平均年齢が84歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆77周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和4年（2022年）8月6日

広島市長 まつい 松井 かずみ 一實

### 3 (広島) こども代表「平和への<sup>ちか</sup>誓い」

あなたにとって、大切な人は誰ですか。

家族、友だち、先生。

私たちには、大切な人がたくさんいます。

大切な人と一緒に過ごす。笑い合う。

そんな当たり前の日常はとても幸せです。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

道に転がる死体。

死体で埋め尽くされた川。

「水をくれ。」「水をください。」という声。

大切な人を一瞬で亡くし、当たり前の日常や未来が突然奪われました。

あれから77年経ちました。

今この瞬間も、日常を奪われている人たちが世界にはいます。

戦争は、昔のことではないのです。

自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは、強さとは言えません。

本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、相手を理解しようとする事です。

本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずです。

過去に起こったことを変えることはできません。

しかし、未来は創ることができます。

悲しみを受け止め、立ち上がった被爆者は、私たちのために、平和な広島を創ってくれました。

今度は私たちの番です。

被爆者の声を聞き、思いを想像すること。

その思いをたくさんの人に伝えること。

そして、自分も周りの人も大切に、互いに助け合うこと。

世界中の人の目に、平和な景色が映し出される未来を創るため、私たちは、行動していくことを誓います。

令和4年（2022年）8月6日

こども代表

広島市立幟町小学校 6年 バルバラ・アレックス

広島市立中島小学校 6年 山崎 鈴







令和4年度  
親子ひろしま訪問団  
訪問の記録

編集発行 秦野市文化スポーツ部文化振興課  
〒257-8501 秦野市桜町1-3-2  
TEL 0463-86-6309